

釧路湿原川レンジャー News

2012 Vol.3

第2回「釧路湿原川レンジャー学習会」が開催されました

平成24年8月8日(水)に、20名が参加して「第2回釧路湿原川レンジャー学習会」を開催しました。

今回は、しべちゃ水辺の楽校での「釧路川の水質・水生生物調査」と鶴居村温根内での湿原学習としまして「ミズゴケ湿原までの散策会」を行いました。

水質・水生生物調査について

北海道開発局では、毎年、北海道の主な河川で地域住民の方々と一緒に川の水質状況を調査しており、平成17年から釧路湿原川レンジャーも参加しています。この調査は、川の水質などを参加者に直接確認してもらい、川に対する関心を高めて頂くことを目的としています。

しべちゃ水辺の楽校にて調査

当日は、小雨が降ったり止んだりする不安定な天気でしたが、参加者がライフジャケットを着用して4名ずつ5班に分かれ作業しました。調査は水温・川底の感触・流速・透視度などの「川の状態観察」、簡易水質試験用具を使った「簡易水質調査」、川底の石やトラップ（川をかき混ぜ設置した白い布で捕獲）に付着した生物を採取する「川の水生生物調査」、事前に北海道から許可を得て採捕した「魚類の観察」などを行いました。

●調査結果

調査結果を下表にまとめました。A～Dの4段階で評価すると「川の状態観察」の透視度※1)と川底の感触ではBランクでしたが、DO（溶存酸素）※2)、NH₄-N（アンモニウム態窒素）※3)、水生生物の生息など他の項目すべてが1番良いAランクとなり、川の環境としては非常に良好であるとの結果となりました。

※1) 直上流で他の班の方が歩く際に若干濁ったため、低くなったと思われる。

※2) DO（溶存酸素）は、水に溶けている酸素量のこと、水が汚いと少なくなる。

※3) NH₄-N（アンモニウム態窒素）は、糞尿、農薬、肥料などが元になって川の水に溶けこみ、値が大きいほど毒性が強くなり、魚などに影響する。

なお、参加者からは次のような意見がありました。

- 想像よりきれいな環境で安心しました。今後とも管理が必要だと思います。
- これからもずっと、有機物は家庭から出さない。工場、農家の方にも協力していただき、ずっとずっときれいな川であって欲しいです。



位置図



流速調査



透視度調査



簡易水質調査



採取した水生生物



水生生物調査



調査後の記念撮影



魚類の観察

表-1 人と河川の豊かなふれあいの確保(遊びやすさ)の調査結果

ランク	ゴミの量	透視度 (cm)	川底の感触	水におい
A	川の中や水際にゴミは見あたらないまたは、ゴミはあるが全く気にならない	100以上	快適である(素足で入りたいと感じる)	不快でない
B	川の中や水際にゴミは目につくが、我慢できる	70以上	不快感がない(履物があれば入りたいと感じる)	
C	川の中や水際にゴミがあって不快である	30以上	不快である(履物をはいても入りたくない)	水に鼻を近づけると不快な臭いを感じる
D	川の中や水際にゴミがあってとても不快である	30未満		水に鼻を近づけるととても不快な臭いを感じる

表-2 豊かな生態系の確保(生き物の住みやすさ)の調査結果

ランク	説明	DO (mg/L)	NH ₄ -N (mg/L)	水生生物の生息
A	生物の生息・生育・繁殖環境として非常に良好	7以上	0.2以下	I.きれいな水 ・ヒラタカゲロウ ・カワゲラ 等
B	生物の生息・生育・繁殖環境として良好	5以上 7未満	0.5以下	II. やきれいな水 ・コガタシマトビケラ ・オオシマトビケラ 等
C	生物の生息・生育・繁殖環境として非常に良好とは言えない	3以上 5未満	2.0以下	III. きたない水 ・ミズムシ ・タニシ 等
D	生物が生息・生育・繁殖しにくい	3未満	2.0を超えるもの	IV. とてもきたない水 ・ユスリカ ・チョウバエ 等

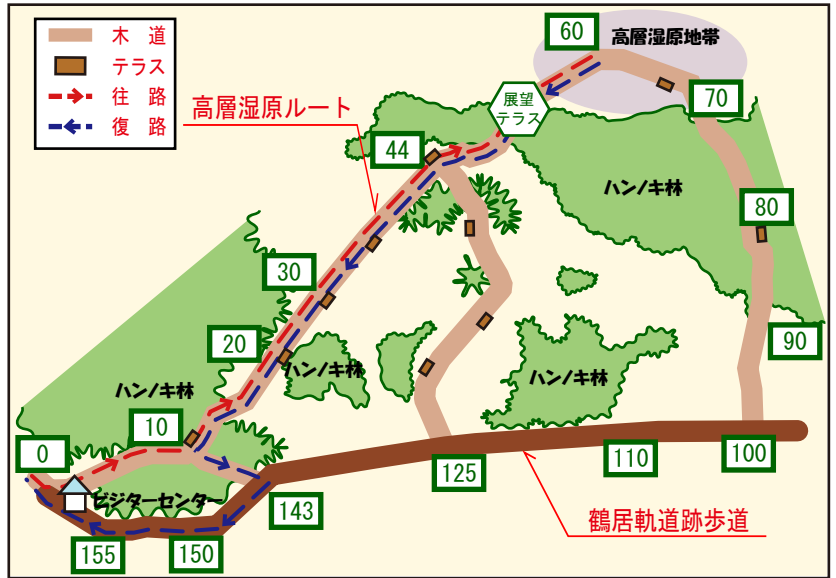
●温根内での「ミスゴケ湿原までの散策会」

午後からは、鶴居村の温根内木道で釧路短期大学の太西教授に説明していただき、「ミスゴケ湿原までの散策会」を行いました。

標茶町からコッタロを通り、温根内に向かうバスの中では、コッタロ付近の低層湿原や温根内の高層湿原、釧路湿原がラムサール条約から国立公園になった経緯など色々なお話を聞きました。

現地に到着後、温根内ビジターセンターをスタートし、高層湿原ルートの約3kmの道のりを2時間かけて散策し、湿原の植物などを中心に丁寧な説明をしていただきました。

参加者からは、太西教授が説明する度に質問が出て、答えていただき、皆さん興味深くお話を聞いていました。なお、説明していただいた植物やミスゴケ湿原の主な内容は、下表にまとめました。



温根内木道 概略図

表-3 「ミスゴケ湿原までの散策会」での説明内容

項目	内容
湿原について	<ul style="list-style-type: none"> 6000年位前には海であったと言われている 温根内木道付近の湿原の深さは4~5mくらい 木道は、植物を痛めつけず、湿原を歩くために造られた 葉が無く、光合成しない
オニノヤガラ (ラン科)	<ul style="list-style-type: none"> そばには、ミスナラ(ドングリの木)がある 栄養はナラタケ(通称ボリボリ)の菌糸から貰う ナラタケの菌糸は約15ha張っており、総重量は100tを超える
ホザキシモツケ (バラ科)	<ul style="list-style-type: none"> 山から湿原に至るちょうど中間に生えている樹木 流れてくる土砂などをせき止めたりして、浄化する
ツリフネソウ (ツリフネソウ科)	<ul style="list-style-type: none"> 開放花の蜜を集めに来た虫の背中に花粉をつけて、受粉する セイヨウオオマルハナバチは、花びらの脇をかじって蜜を集めるため、おしべには触れず、受粉に貢献しない 花の咲かない閉鎖花があり、虫が来なくても自ら受粉できる
ハンノキ (カバノキ科)	<ul style="list-style-type: none"> ここは、他の樹木が混ざっていない、ハンノキの純林 気根(地上に伸びる根)があり、水に対応する 根の先に根粒がありタンパク質を合成する 秋じゃなくても光合成の効率が落ちると緑のまま葉を落とす その落葉はタンパク質を含み栄養があるので、湿原に大量に落ちると富栄養化になりすぎる
クロバナロウゲ (バラ科)	<ul style="list-style-type: none"> 黒っぽいガクで花びらが退化している 中はイチゴで、味は悪い
ガマ (ガマ科)	<ul style="list-style-type: none"> 温暖化にしたがって、増えてくる 円柱型の穂をつける 穂の上半分の細い部分が雄花で、下半分の太い部分は雌花 雄花はそのまま落ちずに残る
サワギキョウ (キキョウ科)	<ul style="list-style-type: none"> キキョウの仲間、秋の花
ミツガシワ (ミツガシワ科)	<ul style="list-style-type: none"> 氷河期の生き残り 雄しべと雌しべの長さが違うものが多いので、種子ができにくい 胃薬の他に睡眠薬などになる 以前はリンドウ科としていたが、DNAを調べたら関係がなかった
サギスゲ (カヤツリグサ科)	<ul style="list-style-type: none"> 種子に白い綿毛がついているので、正式には果実 フタスゲは1つの茎に果実が1個だが、サギスゲは果実が3~4個ある
ヨシ (イネ科)	<ul style="list-style-type: none"> 5m×8mの約40㎡で人間一人分の酸素を供給する
タヌキモ (タヌキモ科)	<ul style="list-style-type: none"> 食虫植物 捕虫囊という小さな袋にプランクトンなどを吸い込み消化する 暖かければどんどん増殖し、増え過ぎて問題になっている
ミスゴケ湿原	<ul style="list-style-type: none"> 日本最大のミスゴケ湿原 ミスゴケは、年1cmずつ伸びるので、水位も1cmずつ高くなる ミスゴケには普通の細胞の他に水を溜める細胞があり、5、6.0cmになったら根元が腐って落ちる ツルコケモモやイソツツジ、食虫植物のモウセンゴケも共存している ツルコケモモは、花がピンクで世界最小級の樹木



太西教授による説明



ハンノキ林の説明



高層湿原地帯



オニノヤガラ



ガマ



サワギキョウ



ホザキシモツケ



ツリフネソウ



クロバナロウゲ



サギスゲ



モウセンゴケ